

水資源分野における気候変動への適応策のあり方検討会 議事要旨

日時：令和8年7月8日(水) 13:00～15:00

場所：中央合同庁舎3号館1階水管理・国土保全局 局議室（web 併用）

議事概要：

事務局から資料の説明を行った後、意見交換が行われた。

「気候変動による水資源への影響評価ガイドライン（案）」についての主な意見は次のとおり。

○本ガイドラインにおいて需要側の変化を扱わないと記載している箇所については、供給側に関してそれなりの情報が得られるという言い方にしてはどうか。

○気候シミュレーションによって得られている将来実験の結果は、低気圧・高気圧や台風の襲来のような日々の変動を的確にシミュレートしたものではないため、特定の年次を表すものではない。このため、平均値等の統計値や極端値の変化に意味がある。水資源管理を主にやってきた人にも、「特定の年次を指すものではない」ことが分かりやすい表現になるよう工夫されたい。

○将来予測は、過去実験と将来実験の比較により示しているということがわかるように説明を加えた方がよい。

○d4PDF_5kmDDS_JP の12メンバ（アンサンブル数）全てのデータを用いる理由として「気候変動の持つ不確実性の幅を的確に表現するため」とされているが、「信頼度を上げるためという表現」としてはどうか。

○陸面過程モデルに別途河道モデルが必要となる理由として、流出量までが出力されるモデルの場合、流量に変換するには別途河道モデルとの組み合わせが必要となることを説明した方がよい。

○35ページの「最も厳しい河川流況を把握することもできる」という記載について、渇水は空間的には広い範囲で起きるものであるため、気候場がそれほどずれていなければ、ある程度信頼のできる予測が可能であると考えられる。

○用語集のアンサンブルメンバの説明は「なお、d4PDF はシングルモデルアンサンブル『である』」とした方がよい。

○過去台風がこなかったから今後も起きないとは限らないということを教えてくれるのが d4PDF であり、このようなモデルを使うことで、過去の観測値は偶然の産物でしかなく、今まで安全だと思っていた状況はそうではなかったということ、あるいは逆にたまたま運が悪かったということがわかるようになる。

○ガイドライン公表にあたっては、第 5 章の活用イメージが「こうやるべきだという絶対の答え」として勘違いされないように配慮いただけるとよい。また、不確実性を持つ評価結果が誤解を生じることなく利用されることを期待している。

○本ガイドラインが将来にわたって水資源に困らないように取り組むきっかけになるとよい。

○本ガイドラインは、まだ発展途上であるが喫緊のアセスメントのために作成したものであり、今後、活用事例を踏まえ、必要な点が改良されていくものと理解している。